

## BOOK REVIEWS

### 大統領と対外政策 —評価の変遷の一断面—

Reviewed by Haruya Anami

**BOOKS REVIEWED:** Richard A. Melanson & David Mayers (eds.), *Reevaluating Eisenhower: American Foreign Policy in the 1950s*, (Urbana, Ill.: University of Illinois Press, 1987, pbk.ed., 1989), viii + 277 pp; Thomas G. Paterson (ed.), *Kennedy's Quest for Victory: American Foreign Policy, 1961-1963*, (N.Y.: Oxford University Press, 1989), xv + 407 pp.

#### 1

学究的な面においても一般的な意味においても、アメリカ政治の中で、大統領という役職は特別な位置を占めている。国家元首と行政府の長を同時に兼ね備えたこの役職は、アメリカ国内のみならず、国際政治においても絶大なる影響力を誇っている。

そのため、歴代の大統領を、その人気、パーソナリティ、業績など様々な指標から順位付けをしようとする試みは、シュレシンジャー調査 (Schlesinger Poll) をはじめ少くない。これは、前述のとおり大統領には国家元首と行政府の長という二つの側面があるため、象徴としての、自らのイメージのアピールに成功していたか否かという要素と、政治家としての、実務的な業績の達成度の高低という要素の二つが複雑に絡みあい、評価の単純化を困難なものにしているからである。

それに加え、この評価は時代によって変化する。評価しようとする者が置かれた時代の趨勢、例えば保守的な思想が優勢であるか否か、によって、評価される過去の時代を視る際のレンズが設定される。評価は須らくそのレンズを通して行なわれ、評価する時点を規準として

評価される時代との類似性が探究され、その有無の割合によって評価が好意的なものになるか否かが決まる。そしてこのレンズは、時代の趨勢が変化するに連れ、全く異なった別のものにとって替わられる運命にある。過去の大統領に対する評価も、この「時代のレンズ」から完全に自由ではありえない。

ここに取り上げる二冊の本は、アイゼンハワー(Dwight D. Eisenhower)、ケネディ(John F. Kennedy)という、50年代、60年代をある程度形付けた各々の大統領について、その対外政策の功績を、今日のレンズを通して評したものである。トマス・ベイリー(Thomas A. Bailey)の指摘を待つまでもなく、対外政策における業績は大統領個人の評価に大きな影響を及ぼすので<sup>1</sup>、このような研究は大きな意味を持つてくる。また、これらの二つとも、主に新進気鋭の若い外交史研究者たちが、各自の専門の地域、分野からおのおの大統領の対外政策の成果を評価した論文の編纂物という形式をとっている。この二人の大統領についての、同じテーマの、同じフォーマットによる研究書がほぼ期を同じくして出版されたという事実は、極めて興味深いことであるといえよう。

本稿は、この二冊を紹介しつつ、最近のアメリカ外交史研究の動向などとも照らし合せながら、その「今日のレンズ」の中での位置付けを探ろうとするものである。

## 2

*Reevaluating Eisenhower* には九つの論文が収録され、二部構成になっている。第一部には二つの論文が当てられ、アイゼンハワーの一般的な政治哲学、および対外政策への基本認識の叙述がなされており、本書の総論的な役割を果たしている。

第一章は大統領研究の重鎮トンプソン(Kenneth W. Thompson)による“The Strengths and Weaknesses of Eisenhower’s Leadership”である。ここでは、アイゼンハワーは個人としては平和主義的、国際主義的な政治哲学を持っていたことが強調される。具体的には、彼は世界政治を考える際には人類の生存を最重要と考えていたこと、その結果として、内外の世論の動向、同盟国の意向、議会との良好な関係の継続に常に敏感であったこと、政府内での政策決定では部下の間の活発な議論を重視しつつもその中でのコンセンサス構築に努力したこ

と、がその要素として挙げられている。しかしながら、議会や国内世論の動向を重視し過ぎたことにより、逆にそれらによって縛られる場合もあったことなどがアイゼンハワーの指導力の弱点となった、とも述べられている。

第二章は本書の編者の一人であるメランソン (Richard Melanson) の “The Foundations of Eisenhower’s Foreign Policy: Continuity, Community, Consensus” である。この論文では、アイゼンハワー外交の基調は、ウッドロー・ウィルソン、外交評議会に始まった、集団安全保障、国際協力、民族自決を信奉する「冷戦—国際自由主義」の流れを汲むものであったとし、朝鮮戦争時の NSC-68 に代表される、国際共産主義の脅威に対して積極的に軍拡を進めていこうとする「包括的封じ込め」路線と対立していた、と位置付けられている。前政権時には後者が優勢だったのだが、アイゼンハワーは前者をアメリカ国内のコンセンサスとして定着させるよう努力し、国内へ向けてアメリカの「道義的責任」の必要性を説いた。また、それに向けては国内の経済的安定が必須であると考え、その文脈から通常兵力削減による財政均衡を目指した「ニュー・ルック戦略」が登場した。しかし、同時に彼は反共精神をも堅持していたため、その対外政策の結果を複雑なものにしている、と結論されている。

以下の七章は全て第二部であり、アイゼンハワー期の対外政策を特定の地域、問題領域に限って評価している。

第三章と第四章ではソ連・中国ブロックに対する外交に焦点が当てられている。まずアメリカ外交史の碩学グレーブナー (Norman A. Graebner) が、50年代に同時代に発刊された政府公刊文書、新聞記事、回顧録などをもとに伝統的なアイゼンハワー外交の評価を展開する (“Eisenhower and Communism: The Public Record of the 50’s”)。それによると、アイゼンハワーと国務長官ダレスは共に「国際共産主義」観念の囚人であり、ソ連と中国を一枚岩と見なし、共産中国不承認を継続し、南ベトナムなどアメリカ寄りのアジアの国々へのてこ入れを欠かさなかった、とされる。それに反し、本書のいま一人の編者で新鋭の外交史研究者メイヤーズ (David Mayers) の “Eisenhower and Communism: Later Findings” では、最近入手可能になった史料が駆使され、グレーブナーによる伝統的解釈に反駁が加わっている。その論文では、実はアイゼンハワー個人は中ソ間に亀裂が生じつつあることを十分認識しており、54年のジュネーブ会議、第一次金門島・馬祖島危機を通して中国に外交的、経済的、軍事的圧力をかけ続け、毛沢

東がソ連に対して不合理的な要求をせざるをえないような状況を狡猾に作ってその亀裂を広げようと務めていたが、国内でのチャイナ・ロビーの影響からその政策は中途半端に終わってしまった、との解釈が提示されている。

第五章はイマーマン (Richard H. Immerman)による“Between the Unattainable and the Unacceptable: Eisenhower and Dienbienphu”である。ここでは、53年から54年にかけての第一次インドシナ紛争でのディエンビエンフー陥落の危機の際、ラドフォード将軍ら軍部の強硬派はフランスを援助してベトミン軍に対し戦術核を使用するべきだと主張したが、それを押えたのはアイゼンハワー自らの軍不使用主義であった、との過程が詳細に描かれている。

第六章はゾウマラス (Thomas Zoumaras)の“Eisenhower’s Foreign Economic Policy: The Case of Latin America”であり、題名が示す通りラ米地域に対する経済政策が取り上げられている。この分野でのアイゼンハワーの評価は否定的なものであり、彼が指導力を十分には発揮しなかったために効率よい経済政策を行なうための制度的革新が整わず、議会対策も行なわれなかったため、結果は「ラ米の構造的な低開発状況を克服するための包括的な計画というよりは、冷戦環境への不適切な反応」(p.156)に終わってしまった、とされている。

第七章にはスタイヴァース (William Stivers)による“Eisenhower and Middle East”が当てられている。アイゼンハワー期にはレバノンへの介入、スエズ危機と中東に関する問題が頻発した。しかし、以前の章で指摘されているアイゼンハワーの国際主義の本質は、彼の第二次大戦中の連合軍総司令官としての、また戦後の北大西洋条約機構軍最高司令官としての経験に由来する「ヨーロッパ中心主義」にあった。そのため、アイゼンハワーの中東問題への対処は、短期的には成功を治めてはいるものの、長期的な視野を欠いたものであり、「彼が失った機会という観点から、結果的には否定的に評価されるべきもの」(p.214)であると結論付けられている。

第五章から第七章までは第三世界の地域への政策を対象としていたが、第八章“Restoration and Reunification: Eisenhower’s German Policy”では、本書で唯一ヨーロッパ地域が扱われている。アイゼンハワー期のドイツの復興、北大西洋条約加盟問題に関して、筆者バーレイ (Anne-Marie Burley)は、西ドイツのNATO加盟と、西側同盟への忠誠を確保したことから、アデナウアーの政策への支持とアメリカ自身の国益の擁護を両立させたとして、「輝かしい成功」(p.222)で

あったと賞賛している。

第九章はストロング (Robert A. Strong) による “Eisenhower and Arms Control” である。アイゼンハワーは原子力時代の二人目の大統領として、核兵器の存在理由を模索するという微妙な仕事を引き受けることを余儀なくされた。しかし、その重圧にも拘らず彼は自らの平和主義を押し出し、「平和のための原子力」、「オープン・スカイ」など、画期的な軍縮構想を打ち出したことは、それらが実際には国際的に実を結ぶことがなかった事実を除いて考えても、評価されて然るべき業績である、とこの最終章は結ばれている。

### 3

*Kennedy's Quest for Victory* は、基本的には十一章から構成されているが、序章として編者のペイターソン (Thomas G. Paterson) が “John F. Kennedy's Quest for Victory and Global Crisis” と題された論文を書いており、この書物全体の総括的な役割を果たしている。この序章の中に描写されているケネディは、共産主義圏との闘いに勝利しようとした冷戦の戦士であり、戦後世界に広がったアメリカ的価値を維持し続けようとする覇権主義者である。彼の大統領就任時には、ラオス、ベトナム、コンゴでの内戦、キューバの共産化、第二次ベルリン危機など世界は紛糾していたが、ケネディはこれらに対し、「強さ」を信奉する自らの信条をもってあたった。すなわち、東西問題に関しては、40年代の冷戦観念、反共主義の復活、第三世界との問題にはドミノ理論、反革命をもって、ともに対峙している相手を制しようとしたのである。このケネディの「勝利への希求」によってかれは対外政策において多くの危険を冒し、彼以降の大統領にとっては忌むべき前例の数々を残す結果になった、とペイターソンは訴える。ケネディの任期中には、軍備拡張、ベトナム介入のドロ沼化、第三世界での革命運動への抑圧政策が事実としてあった。ペイターソンにとってケネディとは、シュレシンジャー (Arthur M. Schlesinger, Jr.) がいうように「チャンスを生かすことなくこの世を去った」のではなく、「実際にはチャンスはあったのであり、ただそれに失敗しただけ」(p.23) なのである。

これ以下の十一の論文は、基本的にはこのペイターソンのテーゼをおのおのの専門の地域、領域の事例において実証する形をとって

る。第一章は米欧関係の専門家コスティグリオーラ (Frank Costigliola) の “The Pursuit of Atlantic Community” である。ケネディは西ヨーロッパ各国との関係について、アメリカを含めた「同位の共同体」構築を訴えていたが、その内実はアメリカの覇権を求めたものであった。ヨーロッパに対する関税引き下げ要求、各国の防衛負担率の引き上げ、多角的核戦力などはアメリカの強さを修復するために周到に考えられたものであったが、ドゴールに代表されるヨーロッパのナショナリズム、ベルリン問題などの阻害要因によって成果を上げられなかった、とされる。

第二章、ボーデン (William Borden) の “Defending Hegemony: American Foreign Economic Policy” では、前章と同様の視点からケネディの対外経済政策が語られる。ドルの価値切り下げを拒んだケネディは、彼の任期中にドルを短期的には強くすることに成功し、62年貿易調整法によって米欧間貿易の赤字を若干改善した。しかし、アメリカ国内の保護貿易の圧力から、ヨーロッパにアメリカ産農作物を買わせること、防衛負担を増やすことには失敗した。

第三章はカナダの外交史研究家グラナットスタイン (J. L. Granatstein) による “When Push Came to Shove: Canada and The United States” であり、ケネディがこの隣国の主権に対していかに鈍感であったかを解いている。ケネディは経済的な自主性を主張するカナダを疎んじ、ディエフェンベーカー首相を毛嫌いしたため、60年代前半の米加関係は緊張に満ちたものになった、と述べられている。

第四章にはラ米地域の専門家レイブ (Stephen Rabe) の “Controlling Revolutions” が当てられている。ケネディは就任早々ラ米諸国に向けて「進歩のための同盟」構想を打ち出し、多額の援助を行なったが、それら全てもとどのつまりは、対ソ同盟を強化するための「冷戦政策」の一環に過ぎなかったのだ、と主張される。また、50年代から頻発していた革命に対しては、「安定した民主政体への支持」を標榜しながらも、実際には反共体制堅持のために非民主的な指導者を支持することになり、長期的にはラ米の民主化を妨げる結果になった、(p.122)とされている。

ケネディ政権時ではラ米内でも特にキューバが象徴的に問題化したため、改めて一章が当てられており、編者のペイターソンが再び筆をとっている (“Fixation with Cuba: The Bay of Pigs, Missile Crisis, and Covert War against Castro”)。まず、ケネディにとって初めての対外危機であった61年4月のピッグス湾侵攻事件は、前政権の計画

を単に継承したものだという従来の解釈に反し、ケネディ自身の好戦性を如実に反映したものだだった、との解釈が提示されている。62年10月のキューバ・ミサイル危機は国際危機管理の成功例だと見なされているが、実際にはケネディの反ソ的性格、カストロへの嫌悪によって、相手との交渉による解決が遅れるなど、対応が危険な方向に向かう可能性が十分にあったとされる。また「マングース作戦」で知られているように、ケネディはその任期中にカストロ暗殺計画を黙認し続けていたのだった。

第六章はリトル (Douglas Little) による “From Even-handed to Empty-handed: Seeking Order in the Middle East” である。ケネディ在任期、中東は比較的平穏であったにせよ、彼の政策は前任者、後任者のそれとは一線を画したものであった。すなわち、イスラエル支持一辺倒ではなく、アラブのナショナリズムの本質を理解し、ナセルは現実的な中立主義者であり、イデオロギー的ではなく経済的な自立を目指しているのだと見なし、融和の可能性を模索した。また、イスラエルのテル・アヴィヴを援助するにも、パレスチナ難民問題の解決協力を条件にした。しかしながら、62年のイエメン戦争により再びアラブ間、アラブ・イスラエル間の紛争が激化し、これらの努力が実を結ぶことはなかった。それでもなお、ケネディの対中東政策は、それほど覇権主義的であったとは考えにくい。

第七章はフェッツァー (James Fetzer) の “Clinging to Containment” で、対中国政策が扱われている。ケネディ政権は以前の政権の「封じ込め」路線を踏襲するとともに、共産中国に対する更なる敵意を露にした。それは、ケネディ自身の、共産中国を「膨張主義的で攻撃的」(p.197) と見なしていた信条、および49年に中国を「失った」党の政権としての立場に由来するものであった。そのイメージは第三次金門島危機においての共産中国の武力行使の抑制を経ても変化せず、国務省から提起された対中国食物援助案に対しても難色を示し、その実現を妨げた。

第八章では、中印国境紛争で上の中国問題と不可分の南アジアの問題が取り上げられ、マクマーン (Robert J. McMahan) が担当している (“Choosing Sides in South Asia”)。この論文では、その中印紛争においてケネディ政権がインドを中立から西側同盟寄りに転向させようとしたことにより、既にアメリカ寄りであったパキスタンに不安がらせ、逆に中国に接近させてしまう結果となり、カシミール戦争以来のインド、パキスタン間の敵対関係の解消の可能性を摘み取ってしまう

た過程が描かれており、その際のケネディの政策の稚拙さが強調されている。

アジアで最後に検討される地域はベトナムであり、バセット (Lawrence Bassett) とペルス (Steven Pelz) の共同論文である (“Failed Search for Victory: Vietnam and the Politics of War”)。ケネディは、ジョンソン政権時に拡大することになるベトナム戦争を、単なる内戦から国際紛争へエスカレートさせることの一助を成した。介入軍を2万人近くに引き上げ、ナパーム弾の使用を許可し、ゴ・ジン・ジェムの排斥を黙認したのは彼であった。ケネディ政権には、国民解放戦線 (NLF) がいかにベトナム農民に人気があるかを理解する人材がいなかったのである。また、もし仮にケネディが64年に再選されたとしても、63年時点での彼の関与の度合を考慮したならば、彼がベトナムからの撤退を決断するようなことはあり得ない、と結論づけられている。

第十章はノーア (Thomas J. Noer) による “New Frontiers and Old Priorities in Africa” である。ケネディはある時にはアフリカでの新独立国家建設への動きに共感を示したが、基本的にその大陸も冷戦も展開される場所と考えていた。ケネディは、アイゼンハワー政権の、地下資源が豊富なコンゴを西側陣営に留めようとする政策を受け継いだ。また、以前はアメリカと敵対していたギニアのセコウ・トゥレと和解し、アンゴラを独立させるためにポルトガルに圧力をかけ、南アの人種隔離政策への反対を示威するために武器禁輸などのジェスチャーをとった。

本書の最終章はそれまでのものとは趣を少々異にするもので、ケネディによって発案された「平和部隊 (Peace Corps)」がテーマに取り上げられており、メイ (Gary May) の筆による (“Passing the Torch and Lighting Fires”)。低開発地域への教育、技術面での援助を目論んだこの平和部隊でさえも、冷戦に勝利するための手段の一つに過ぎなかったことがここでも強調されている。この章は実際に平和部隊に参加しエチオピアに赴いた人のインタビューを中心に構成されており、最初は希望を持って参加したものの、自分たちの努力が実を結んでいないことに徐々に気づき、ケネディの構想が時期尚早であると感じるに連れ、幻滅、脱力を余儀なくされた、と語られている。



## 4

二冊とも複数の著者による論文集だが、内容を概観しただけでもそれぞれの中に一貫したイメージが存在することが解るであろう。すなわち、*Reevaluating Eisenhower* でのアイゼンハワーは、自らの信条に基づいて巧妙に行動し冷戦の中のアメリカを平穩に導いた平和主義者、そして *Kennedy's Quest for Victory* の中のケネディは、冷戦に勝利しようとし世界のあらゆる地域にアメリカ的価値を強要しようとしたもその稚拙さにより失敗した好戦主義者、である。そして、これは取りも直さず、80年代にこの二人の大統領に対して抱かれてきたイメージそのものなのである。

これはアイゼンハワーにおいてより顕著である。従来アイゼンハワーは、シャーマン・アダムスやジョン・フォスター・ダレスという有能且つ強い個性を持った腹心を抱え、政治の実務面においては彼らを始めとする閣僚、補佐官らに政策決定と施行を一任し、大統領としての自らは彼らの決定に盲判をひたすら押すのみで、政治よりはゴルフにより大きな興味を持っていたという、いわば「弱い」大統領との位置付けが一般的であった。しかし、80年代に入ってから、この評価を見直そうとする動きが現われた。すなわちアイゼンハワーは、政治的な問題に対して自ら興味を持ち、情報を処理し、判断し、会議を開き自分の見解を強く押し出し、政策決定に大きな影響を与えた、とするもので、むしろ彼は有能な「強い」大統領であった、とする論調である。この動きは「アイゼンハワー修正主義 (Eisenhower revisionism)」と呼ばれる、まさに「アイゼンハワーを再評価する」議論なのである。<sup>2</sup>

これに対しケネディに関しては、80年代以来その評価の著しい失墜が観察できる。志し半ばにしてこの世を去った若き「円卓のアーサー王」は、彼の後継者たちへの幻滅とも重なり、その後英雄視され、美化されてきた。それが80年代に入ると、彼の女性スキャンダルが暴露されたり、彼の名声はうわべだけのもので彼の政治的業績を伴ったものではなく、彼の政策は実は失敗ばかりであったとの評価が一般的になるなど、彼のイメージは極端に否定的なものへと変化した。<sup>3</sup>

更にこれらは、「今日のレンズ」を通して得た二人の大統領の像、とも言い換えることができる。アイゼンハワーはレーガン同様共和党か

らの大統領であり、冷戦が最も激化した50年代を平穩に導き、そのレトリックによって国民を安堵させた大統領としてレーガンに準えられている。<sup>4</sup> 一方、60年代リベラリズムの象徴であったケネディは、著しく保守化が進んだレーガンのアメリカにおいて、偶像破壊の対象となっているのである。本稿で紹介した二冊は、この80年代の潮流を如実に反映した外交史観を呈しているといえよう。

このような本が出てきたことのいまひとつの背景として、アイゼンハワー記念図書館、J・F・ケネディ記念図書館の資料公開が進み、50年代、60年代の研究が行ない易くなったことが挙げられる。殊にアイゼンハワーの場合、新たに入手可能になった資料での彼の姿が従来のイメージから大きく駆け離れていたのが話題となったこと、および新資料が *Foreign Relations of the United States* に編集され既に大部分が公刊されていることも手伝い、「アイゼンハワー修正主義」を表面に打ち出した外交史研究が現在まで少なからずなされている。また、*Reevaluating Eisenhower* 中の論文には、既に別の形で発表済みのものが転載されている場合がいくつか見受けられる。<sup>5</sup> その意味で *Reevaluating Eisenhower* は新しい事実の発掘といった点での貢献度は低い。

ケネディに関しては、未だ新しい資料の入手がそれほど容易になっていないため研究はアイゼンハワーの場合ほど活発でなく、*Kennedy's Quest for Victory* はそれを用いた本格的な外交史研究の嚆矢であるといえよう。その著作が既述の如くのケネディ評価の下降現象と重なり、対外政策における彼の攻撃性、拙劣さを強調するに至ったのである。このような、膨張性、攻撃性をアメリカ外交一般の特徴であるとする歴史観は「左翼史観」と呼ばれ、この本の編者ペーターソンは、以前の著作において早くからケネディ外交をその視点から眺めることを提唱している。<sup>6</sup>

しかしながら、この二冊を通読すると、それぞれの大統領の対外政策についてより均衡した印象を抱かざるを得なくなることもまた事実である。アイゼンハワーに関しては、中東、ラ米地域への政策は成功といえるものではないのではないか。ケネディに関しては、63年6月アメリカ大学での「平和のための戦略」演説、その後の部分的核実験停止条約などに象徴される米ソ歩み寄りの動きは、彼自身の攻撃性から説明し得るものなのであろうか。

また、90年代に入り、既述したような大統領評価を改めて見直そうとする動きが緩やかながら起こり始めている。まず、アイゼンハワー

に関して、「アイゼンハワー修正主義」によりその影響力が著しく過少評価されたダレスを、アイゼンハワーとの関係はどちらかがより優勢だったのではなく相互補完的なパートナーシップを保っていたと捉えるべきであるとして再評価しよう、とする主張が生れている。しかもそれは、*Reevaluating Eisenhower* への寄稿者の一人であり、外交分野での「アイゼンハワー修正主義」の先鋒であったイマーマン自身によってなされているのである。<sup>7</sup>

またケネディに関しては、外交での業績の見直しへの動きは未だ見られないものの、大統領としてのケネディとその時代を好意的に再々評価しようとする著作が始めている。<sup>8</sup> この新たな傾向によってケネディの対外政策への新たな解釈が登場するであろうことは想像に難くない。

このような大統領評価の変化は、また新たな「時代のレンズ」が登場したことを示しているに過ぎず、いずれは更に新しい時代のそれにとって替わられる運命にあるものの先駆け以上の何ものでもないかも知れない。しかし、80年代というある意味で特殊な時代を経たことにより、より均衡のとれたイメージが浮かび上がってくる筈であると評者は信じる。いずれにせよ、アイゼンハワー、ケネディの対外政策を今後研究するには、特定の立場、時代の風潮に囚われない、よりバランスされた視点による評価をすることが、これからの課題となるといえよう。

しかし、以上に掲げたこの二冊の特徴とそれに付随する欠点、それへの反論、大統領評価への新たな動きは、これらの本の重要性を必ずしも低めるものではない。評価の変遷の一断面から見た大統領の対外政策研究の集大成を試みたこの二冊は、水準の高い秀作として、長く記憶されるであろう。

(Haruya Anami, a doctoral course student in International Relations, Sophia University, Tokyo; research fellow at the Japan Institute of International Affairs, Tokyo)

#### Notes

- 1 Thomas A. Bailey, *Presidential Greatness: The Image and the Man from*

## BOOK REVIEWS

- George Washington to the Present*, (N.Y. : Appleton-Century, 1966), pp.245-6.
- 2 「アイゼンハワー修正主義」の流れを汲む代表的な著作として以下を参照。Fred I. Greenstein, *The Hidden-Hand Presidency: Eisenhower as a Leader*, (N.Y. : Basic Books, 1982); Stephen E. Ambrose, *Eisenhower: The President*, (Vol.2,) (N.Y. : Simon and Schuster, 1985). また、アイゼンハワーの評価の変遷については以下を参照。Anthony James Joes, "Eisenhower Revisionism: The Tide Comes In," *Presidential Studies Quarterly*, Vol.15, Summer 1985, pp.561-71; Arthur M. Schlesinger, Jr., *The Cycles of American History*, (Boston, Mass. : Houghton, Mifflin, 1986), pp.387-405. (シュレシンジャー, 高村宏子訳『アメリカ史のサイクルII—大統領とリーダーシップ』パーソナルメディア, 1988年)
  - 3 例えば以下を参照。Peter Collier and David Horowitz, *The Kennedys*, (N.Y. : Warner Books, 1984); Garry Wills, *The Kennedy Imprisonment*, (Boston, Mass. : Little, Brown, 1981). (ウィルス, 高橋正訳『ケネディ王国』TBS プリタニカ, 1983年)。またケネディの評価の変遷については次を参照。Schlesinger, *op. cit.*, pp.405-18.
  - 4 Fred I. Greenstein, "Ronald Reagan - Another Hidden Hand Ike?" *PS: Political Science and Politics*, Vol.23, March 1990, pp.7-13.
  - 5 トンプソンのものは, Kenneth W. Thompson (ed.), *The Eisenhower Presidency*, (Lanham, Md. : University Press of America, 1984), メイヤーズのものは, David A. Mayers, *Cracking the Monolith: US Policy Against the Sino-Soviet Alliance*, (Baton Rouge, La. : Louisiana State University Press, 1986), chap.5, イマーマンのものは, Richard H. Immerman and George Herring, "Eisenhower, Dulles, and Dienbienphu: 'The Day We Didn't Go to War' Revisited," *Journal of American History*, Vol. 71, September 1984, pp.343-63.をそれぞれ参照。
  - 6 Thomas G. Paterson, "Bearing the Burden: A Critical Look at JFK's Foreign Policy," *Virginia Quarterly Review*, Vol.54, Spring 1978, pp.193-212; idem, *Meeting the Communist Threat: Truman to Reagan*, (N.Y. : Oxford University Press, 1988), chap.10. ペイターソンを「左翼史派」と位置付けているものとして次を参照。William J. Medland, *The Cuban Missile Crisis of 1962: Needless or Necessary*, (N.Y. : Praeger, 1988), pp.117-18. ペイターソン以前に左翼史観的立場からケネディ外交を描写した著作として下を参照。Richard J. Walton, *Cold War and Counterrevolution: The Foreign Policies of John F. Kennedy*, (N.Y. : Viking Press, 1972).
  - 7 Richard H. Immerman (ed.), *John Foster Dulles and the Diplomacy of the Cold War*, (Princeton, N.J. : Princeton University Press, 1990).イマーマンは最新の論文でも、「私は自分をアイゼンハワー修正主義者だと思ったことはない。アイゼンハワー修正主義によって彼が万能の大統領であったような印

象を持ちがちだが、彼がうまく成し得たこととそうでないことを問題によって見分けることが必要であり、それらの事象と彼の信条との関係、国際環境との関係を見極めるべきなのだ」と訴えている。Idem, “Confessions of an Eisenhower Revisionist: An Agonizing Reappraisal,” *Diplomatic History*, Vol. 14, Summer 1990, pp. 319-42.

- 8 例えば以下を参照。David Burner, *John F. Kennedy and a New Generation*, (Boston, Mass. : Little, Brown, 1988); William Manchester, *One Brief Shining Moment : Remembering Kennedy*, (Boston, Mass. : Little, Brown, 1988); Paul Harper and Joann P. Krieg (eds.), *John F. Kennedy : The Promise Revisited*, (Westport, Conn. : Greenwood, 1989).

〈本誌掲載内容〉

論文

「北方領土」問題解決への道：北太平洋地域に非核安全保障機構を形成するための出発点とするために米ソの協力が必要……………三輪 公忠

地方から見た日米経済摩擦……………草野 厚

アメリカの影響力衰退とアメリカ精神の試練  
……………高柳 俊一

日加協力関係の意味するところとその再考  
……………ジョン・シュルツ

日本におけるカナダ研究の概況……………吉田 健正

書評

大統領の対外政策：評価の変遷の一断面…阿南 東也